

書評

『考えるトヨタの現場』

田中正知 著 ビジネス社 定価1,680円

日本の経済発展を二〇世紀最大の事件に数える人もいる。では、なぜ戦後日本のものづくりは繁栄できたのか。この問い合わせに対する鍵を本書に見出すことができる。それは現場で高品質のものをつくる思想と行動にある。かつて日本は戦争に負け、その打ち碎かれたプライドの補償作用として経済成長をなし遂げたとの説明がよくなされた。だがおそらくそうではない。日本人は現実のなかに確かなものを求めた。変転してやまない世界のなかで、嘘をつかない何かを求めた。それがものづくりだった。

トヨタはこのことを実際に見事に体現している。それは思想であり、しかもも高度に現実的な実存思想でもある。しかも抽象的ないし観念的なレベルのものではなく、生きて働く人間に関わるもので

ある。このことは繰り返し述べられる「トヨタ生産方式とはものの考え方」というフレーズに もよく現れている。

ただし、不用意に思想というと誤解を受けるかもしれない。それはよき習慣ないし、よき生への現実的探求と言い換えてもよい。日本のものづくりには現実的な貫性への感覚が並外れて鋭いという特徴がある。そこでは、現実世界と理想世界は統合され、一体のものとして追求される。仕事とは変転する世界といふ舞台で繰り広げられる一対の舞踏となる。

トヨタのみならず会社に採用され、働きはじめる人は職場の権力関係に従うこととなる。一民間機関に過ぎない会社

組織にも権力がともなう。しかし、この権力は無原則かつ野放図に適用されるものではない。社会や人の価値観との関係で許容されうるに過ぎない。つまり、社会を発展させ、人間に尊厳と役割を与えることが必要条件となる。トヨタではこのことが実によく組織化されていると感じる。

こうすることで継続すべきものと変化すべきものとが調和される。これは渋澤栄一や福澤諭吉といった先人たちが追求し実現したものだつた。ここに実業の思想というべきものが存在する。

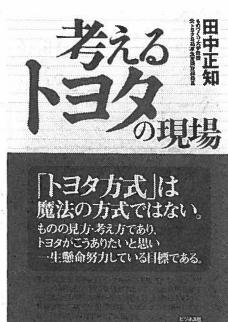
こうして見るとトヨタとはトヨタのものであつてトヨタのものではない。本書はあくまでもトヨタを一つの実験と見なし、その基本的な枠組みは普遍的に応用可能なものとする。そして、その価値観、原点とは人間と社会であることは疑いない。人間にに関する卓抜な觀察にもこのことがよく現れている。たとえば人間を完全なものと見ることをしない。むしろ誤るもの

とする。ここから眼で見て、手で触つて確認する行動様式が導出される。つまり、五感によるものを相対的に信頼することで、リスクを最小化する。有名なカンバン方式一つとっても、このような姿勢はきわめて濃厚であるう。

さらに、取り巻く環境について変化を常態とする。諸行無常とする。社会も人間も変化するものとして扱う。さらには変化への適応を望ましいものとする。

今日日本のものづくりの強みとして脚光を浴びる組み合わせやすりあわせといった手法も、つまるところ人間の価値観や思考力なしには成立しない。すべて人間の成長に関わるよき習慣といえる。

原点を人と現場に置き、現在進行形で脈打ちつつ共進化する様相を見事に描くものであり、数あるトヨタ関連書の中でも本書がユニークな位置を占めるることは間違いない。



ヨタのものであつてトヨタのものではない。本書はあくまでもトヨタを一つの実験と見なし、その基本的な枠組みは普遍的に応用可能なものとする。そして、その価値観、原点とは人間と社会であることは疑いない。人間にに関する卓抜な観察にもこのことがよく現れている。たとえば人間を完全なものと見ることをしない。むしろ誤るもの

社会生態学研究者 森里陽一
現在点を人と現場に置き、現状形で脈打ちつつ共進化するトヨタ関連書のなかでもがユニークな位置を占めるは間違いない。

『個人情報保護はこう変わる』

牧野二郎 著 岩波書店 定価1,890円

よく見ると情報という日本語は実によくできている。「情」と「報」からなつていて、情は人間的な信頼関係である一方で、報は世間で共有される公的次元のものと読める。

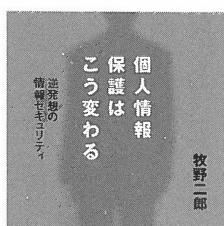
最近、気が付くといつもの間にか出現しているルールがある。よい悪いは別にして、女性専用車両などがその典型かもしれない。いつそう社会生活に影響を持つのが個人情報保護法だ。最近では同窓会名簿もうかつにしてくれないというシビアな世の中になっている。法律の施行にともなつて同じテーマの本はたくさん刊行されている。だが、この本は実務書でも実用書でもない。すぐ使用できる具体的な情報が多い。むしろ考え方や制度の未来に関わる。弁護士の本だからといって、難

しい法律用語が飛び交うかといふとそんなことはない。ちょっと高級な読み物というタッチで、予備知識がなくても読めるところがありたい。

ポイントは二つある。一つは個人情報流出の事例が手際よくまとめられていること、それともう一つは人間や社会の観点から課題が提示されていることである。

とくに企業の事例には一見の価値がある。ヤフー！BBの情報流出事件はまだ記憶に新しい。このような事故は日々起こつていて、しかもそのほとんどはヒューマンエラーに端を発しているという。実際にリニアティに富むもので、決して他人事でないのがよくわかる。

その動きを受けて、個人情報



個人情報保護法って
悪法ではないですか？

個人情報保護法についての問題点を解説する本。著者による解説文と、著者の意見をまとめた「意見欄」がある。

方で、反作用も生む。情報化社会や知識社会とは、だいぶ前からいわれているけれども、本来人の間の能力や自由を高めるはずの情報が管理強化の道具になると皮肉なものだ。さらにより広く視野をとると、情報と社会の問題もある。技術が高度化すると、専門性も会との距離感はますます拡大し上がる。そして専門家と一般社上りの技術が高度化すると、専門性も会との距離感はますます拡大していく。相互にコミュニケーションがとれなくなる。ここにシヨンがとれなくなる。ここに社会的に十分な是認を経ない制度が突如出現を見る。最近起つていていることはその表れのようだ。

だが、情報化社会の本格的到來で、「情」の部分、つまり信頼関係が重要でなくなるわけではない。おそらくこの本の主張と大きく矛盾はしないと思うけれども、大事なのは社会の情報化よりも情報の社会化なのではないか。つまり「情」（私）の部分と公共システム（報）との融合である。

結局情報というものはそれ自体意味を持たない。解釈され、現実に適用されてはじめて意味を獲得する。そして、それを可能とするのは結局人間や社会である。

この本は個人情報にまつわるさまざまな問題意識を提供してくれる。だが、肝心の「こう変わる」にあたる部分は不明瞭だ。結局滑つたり転んだりしながら解決策を体得していくほかはないのかもしれない。

社会生態学研究者

森里陽一

『ドラッカー わが軌跡』

P.F. ドラッカー／上田惇生 訳 ダイヤモンド社 定価1,890円

サン・テグジュペリ『星の王子様』で印象的な場面がある。王子様が砂漠できつねに出会う。きっとねは王子様にいる。

「だいじなものは目に見えないんだよ」

同じく二十世紀を生きた社会学者ピーター・ドラッカーは昨年十一月に急逝した。彼は見えないものを見、示した。そして、行動の原理とした。

戦争と革命の世紀たる二十世紀を生き抜き、その渦中でマネジメント、目標管理、分権性、知識社会等の新概念を続々と生み出した。彼の発明したコンセプトは枚挙にいとまがない。

当座は誰も知らないのに、しばらく経つと大昔からの用語のように使用され、常識と見なされる。見えないけれど大切な何かに、名前と生命を吹き込む不思議な哲人



20世纪を駆け抜けた、社會の歴史
プロフィール、シーケンス、組織、人生を学び
GMスローン、IBMワーハウスを融合させし
これはピーター自身が初めて書いた
事実上の“自伝”である

は、巨人の謎を解く鍵が豊富にある。

彼の生涯は不思議な陰影に彩られる。ナチス体制の陰惨な状況については、隠喩的な表現にとどめている。一九三三年にドイツを脱出し、イギリスに亡命した彼の背後にどのような事情があったのか。目前に迫ったホロコーストを、どのように感じたのか。

具体的な記述はないが、濃く深い闇の部分は、きわめてシンボリックにそれぞれの読者の想像力をかき立てる。

さらに、マネジメント体系との観点から読むと興味深い事実が浮かび上がる。かつて彼はある雑誌に、「私のマネジメントへの関心は企業経営に対するものではなく、第一次世界大戦後の文明の崩壊を端緒としていた。そして、それは企業のなかでコミュニケーションを創成することで関わっていた」と述べたことがある。

彼は意識的にか自らの来歴との関係で、マネジメントを多く語らなかつた。しかし、本書

のサン・テグジュペリ『星の王子様』で印象的な場面がある。王子様が砂漠できつねに出会う。きっとねは王子様にいる。

「だいじなものは目に見えないんだよ」

同じく二十世紀を生きた社会学者ピーター・ドラッカーは昨年十一月に急逝した。彼は見えないものを見、示した。そして、行動の原理とした。

戦争と革命の世紀たる二十世紀を生き抜き、その渦中でマネジメント、目標管理、分権性、知識社会等の新概念を続々と生み出した。彼の発明したコンセプトは枚挙にいとまがない。

当座は誰も知らないのに、しばらく経つと大昔からの用語のように使用され、常識と見なされる。見えないけれど大切な何かに、名前と生命を吹き込む不思議な哲人

だった。

しかし、いかなる人間の思想も一朝一夕にできるものではない。そこには個としての経験や価値観が存在する。荒れ野で叫ぶ預言者、来るべきものを示す物見たるドラッカーの生涯を俯瞰し、読み解くにあたって、本書はまたとない好材料を提供する。

本書の価値は、同時代人との交流のなかで、ドラッカー自身の中心的価値観や基本的なものの見方がいかにして生成したかが窺える点にある。

ポランニー、フロイト、マクルーハン、キッシンジャーなどそうそうたる顔ぶれが登場し、彼らとの交流のなかにさりげなくドラッカー自身の自画像が投影される。ドラッカーという知

の巨人の謎を解く鍵が豊富にある。

彼の生涯は不思議な陰影に彩られる。ナチス体制の陰惨な状況については、隠喩的な表現にとどめている。一九三三年にドイツを脱出し、イギリスに亡命した彼の背後にどのような事情があったのか。目前に迫ったホロコーストを、どのように感じたのか。

具体的な記述はないが、濃く深い闇の部分は、きわめてシンボリックにそれぞれの読者の想像力をかき立てる。

さらに、マネジメント体系との観点から読むと興味深い事実が浮かび上がる。かつて彼はある雑誌に、「私のマネジメントへの関心は企業経営に対するものではなく、第一次世界大戦後の文明の崩壊を端緒としていた。そして、それは企業のなかでコミュニケーションを創成することで関わっていた」と述べたことがある。

彼は意識的にか自らの来歴との関係で、マネジメントを多く語らなかつた。しかし、本書には彼のマネジメント体系への原点も実に多く見られる。

強みに集中せよとのマネジメントの心得は、小学校時代の二人の教師に負っている。

社会による救済への批判は、知の先達たるポランニーへの見解にすでに表れていた。

組織を内部からではなく、外部から見るよう経営せよとのメッセージもそうである。イギリス時代のマーチャントバンクで彼はヘンリーおじさんという人物から次のように聞く。

「客が合理的でないと思ったら、外へ出て、外から、客の目で店と商品を見てみることだ。客のほうが合理的だということだが、すぐわかるはずだ。彼らの世界は、こちらの世界とは違うんだ」

あらゆる新アイデアは、個人的な悩みから発するという。ドラッカーの場合もそうだつた。後年の主張との接点から本書を読めば、いつそう新たな視角が育まれることであろう。

森里陽一
社会生態学研究者

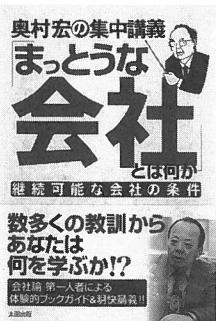
書評

『「まつとうな会社」とは何か』

奥村宏著 太田出版 定価1,470円

社会科学のみならず、現実の人間社会でほぼ避けて通れない存在がある。それが会社だ。さほど古い歴史を持たないにもかかわらず、社会に巨大な影響を及ぼし、人生の質までも左右する機関となつた。

会社は誰のものかという問い合わせが今なお聞かれ。何もエンロンやワールドコム、ひいてはライブドア事件で忽然と姿を現した問い合わせではない。大昔からの議論である。会社が人間にとつて相も変わらず謎だからである。会社の本の持ち味は著者による追求姿勢に多くの負っている。アフリカのサバンナを觀察する自然科学者に通じるものがある。アカデミックというよりは、むろん正しい意味である。信頼感ある一定の視座を提供する。そして、われわれの頭脳を刺



激してくれる。観察対象は会社法でもなければ人事でもない。経営戦略でもなければ、労務管理でもない。あくまでも、会社それ自体である。強いていえば、会社といいう生命体にまつわる思想と行動であり、生きて働く存在としての会社である。

著者のオリジナリティはかなりの程度ここにあると思う。個別分野よりも、全体に焦点を合わせることで、本質に肉迫する。だがその反面、個別分野の論者からはしばしば「牽強付会」などと厳しい批判にさらされた。しかし筆者にとって会社とは一つの、しかし、重要な媒介物であつたことがわかる。つまり、時代や社会、文明を診断する窓である。大きなものの意味を読み解くことができる。意味も訴求力も持たない。存在することと意味を持つこととはまったく別の次元の問題である。しかし、人間社会にあつて重要なのは、事実以上に意味である。人間は意味なき世界に耐えることはできないからだ。

会社も同様である。会社は財・サービスの供給を通じて、社会の経済的要求に応える。それのみならず、従業員に対してもコミュニケーションを取る。アフリカのサバ

とは関係がない。正義とも関係がない。企業を意味ある機関として理解し、納得することとが、人間社会の存続・発展に不可欠の条件であるために過ぎない。

頻発する企業の不祥事も、筆者の問題意識に照らし合わせるならば、会社が社会においてしかるべき意味を獲得できなかつた副作用といえるのかもしれない。

しかも、会社組織は人間にとつて、まだあまりにも最近の発明である。まだ社会がその使用に習熟していない。われわれは歴史的視点からその意味を獲得し、創造しなければならないという厄介な問題にも直面している。

この本自体はきわめて簡便かつ平易である。だが、その視線は深く、鋭い。少々大きめで、が、AINシユタインが最後に書いたものが『物理学とは何か』という入門書だったのを思い出させる。

社会生態学研究者

森里陽一

書

評

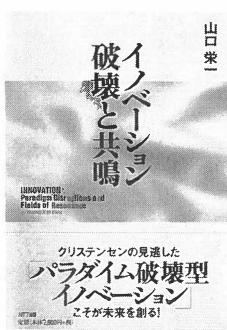
『イノベーション 破壊と共に鳴』

山口栄一著 NTT出版 定価 2,730円

かつて外国のある論者は、「戦後日本の経済政策はつまるところ社会政策にほかならなかつた」と述べた。中小企業政策が典型だが、常に社会の安定と秩序に寄与する形で政策決定がなされてきたのは事実である。

本書は、イノベーションを軸に将来への適用条件を模索する。同時にそれを指し貫く一本の視線がある。それは、日本社会の持続可能性に関わる。その持ち味は、広く社会、そして人々の価値観や行動を確実に視野に収め、政策への一定の筋道を立てているところにある。

クリスティンセンの「攪乱的イノベーション」の概念を中心構成に意識的な搖ぎを与える、新たな価値を創出する構図を見事に描く。そのための効果的な分析用具と提言を与えて



くれる。それらを立体パネルのように鳥瞰する遠近法が魅力である。

しかも登場する事例はスリリングかつ客観的であつて、執筆にかけた時間と労力そして情熱が十二分に伝わってくる。

日本企業の場合、年功序列や終身雇用といった安定的慣習が、かえつてイノベーションの重要な源泉たりえてきた。それらは新技術を実用化し、生産する工業的プロセスにおいて効果を發揮してきた。この分野のマネジメントにおいて、日本は世界有数の実力を保有してきた。しかし、八〇年代以降、産業社会が成熟するに連れ、その輝きを失いつつあつた。

本書の視線は一般解としてのここで必要となるのが、知識のマネジメントである。今後の課題は、知識の生産性をいかにして高めるかにある。技術のイノベーションはその典型である。実は、この手法は、日本が組織として経験したことも手にしたものもない厄介な代物である。

そこで筆者が注目するのは「共鳴場」である。西田幾多郎が「場の哲学者」と呼ばれるように、「場」とは東洋的な思想をルーツに持つ。それは西洋の合理主義では捉えがたく、論理による体系化にそぐわない部分を多く孕む。

新たな産業社会では、この「場」において、人は実存的欲求、つまり生への充足感を手にできるという。そもそも場とは往く川の流れのごとき流転の性

イノベーション・モデルの追求にあるわけではない。むしろ、日本への特殊解、すなわち日本の社会風土と密接不可分の強みを追究する点にある。世界と渡り合っていく独自の論理の探求にある。

日本への特殊解、すなわち日本が形成していく。そこでは変化そのものを秩序の一形態とする思想が必要とされる。

しかし、いかなる理念もコンセプトも方法も、結局のところ政策に具現化されなければ意味をなさない。イノベーション・システムが機能する過程では、同時にさまざまな問題が噴出する。現在の格差問題もつまるところ新たな世界観の浸透過程で必然の現象である。勇躍する層もあれば没落する層もある。

ゆえにこれらの概念を社会的文脈で捉えることが重要となる。答えは、新たな産業社会に必要な場を多くつくっていくということだ。

とするならば、政府にできることは何か。よけいなことをしないことである。人間の実存欲求を素直に認め、本来社会が持つ自己調整能力を十全に発揮できる場の育成を支援することである。

社会生態学研究者
森里陽一

書

評

『コミュニティ／グローバル化と社会理論の変容』

G・デランティ／山之内靖・伊藤茂 訳 NTT出版 定価2,520円

全体的に哲学的ではある。しかし、日頃何気なく使われるコミュニティなる概念が歴史的にいかに生成し、解釈されてきたかを知るよい案内役となる。

明治から昭和にかけての作家永井荷風は、独特の西洋趣味に加えて、江戸文化への憧憬を生涯失うこととはなかつたといふ。われわれが江戸文化と聞いて想起するのは、厚い義理と人情の世界である。いわば、人と人の絆への望郷である。

石は分割しても石のままだが、絆は分割される。それは生き物であり、有機体である。生物が空気を必要とするように、人は絆を必要とする。絆によって人は自己の帰属を確認し、外部世界に意味を見出す。



の作家永井荷風は、独特の西洋趣味に加えて、江戸文化への憧憬を生涯失うこととはなかつたといふ。われわれが江戸文化と聞いて想起するのは、厚い義理と人情の世界である。いわば、人と人ととの絆への望郷である。

裏腹に、近年コミュニティへの渴望感は増しているように思われる。いや逆に、それらのゆえにいつそう社会的関係が重視されているのかもしれない。

しかも、一見経済問題を装いつつ、その内実は、コミュニティの危機感を表出する現象の多さにはあきれるほどだ。一昔前のリストラ旋風も、その危機感は企業共同体の破壊への懸念から発していた。現在喧伝される格差問題や「勝ち組」「負け組」といった議論、敵対的M&Aへの賛否も同様である。これらの問題に対する社会の敏感な反応は、意識的にはともかく、われわれが社会的関係に無頓着ではない事実を、よく示している。

技術や経済の進展とは

だが一方で、コミュニティ分析には生命それ 자체を考察することに似た難しさが常につきまとつてゐる。政治的次元、経済的次元において、コミュニティを適切に扱いかねてきた原因も、その存在の軽さではなく、あまりの重さにある。

しかも、本書の各所で示されるように、グローバル化や技術進歩が、コミュニティ崩壊の危機に拍車をかけている。それは同時に再構築が必要となる事実をも意味する。

なぜなら、それはすでに「当然にしてそこにあるもの」ではない。伝統による正統化が図られた共同体は、わけても都市やバーチャル空間の生活者たちにとって、きわめて疎遠かつ非現実なものとなつていて。換言すれば、伝統や慣習、規範を所与のものとする観念 자체が、常識ではなくなりつつある。最小単位としての家族ですら、岐路に立たされている。

では、それらはコミュニティの無効を意味するのだろうか。

社会生態学研究者

森里陽一

そうではない。詳しくは述べられていないが、NPOの興隆などは複雑な都市においてすらコミュニティが必要不可欠な事実を表している。八〇年代以降、平均的アメリカ人の多くの割合が、週四時間を何らかの非営利活動に費やすという。新たな共同体獲得のための試みは、すでにはじまっているのだ。

甘美な郷愁に満ちた過去の復活が望みえない以上、いかなる形態であれ、コミュニティを「創造する」という選択肢を取りはほかはない。これが本書の論点でもある。裏返せば、コミュニティを、異質性を前提としたネットワークとして変革の担い手とせよというメッセージもある。

社会とは、そもそも何らかのかたちで構成員の信念や理念と無縁には存立しえない。本書のやや歴史哲学的な考察は、方法において抽象的ながらも、その着地点は、きわめて具体的なものである。

『「みんなの意見」は案外正しい』

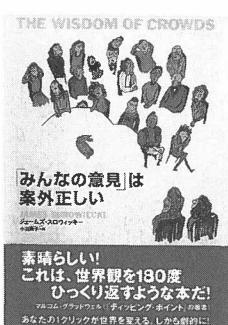
J・スロウイッキー／小高尚子訳 角川書店 定価 1,680円

この頃の村上ファンと/or/格差の問題についての一般的の反応を見ていて感じることがある。それは、社会とは確かに存在しているということだ。

その鼓動は、大衆による是認よりも、大衆による拒絶に現れる。「とかく人の世は生きにくい」という。人がいれば紛争の火種の類は起かる。そんな場所をいくぶんでも住みやすいところにしようと/or/いうのが、人類のささやかな望みだつた。その思惑はそれでいいとして、問題はそこにいたる方法にある。

あえておおざっぱに言えば、しばらく前まで、イデオロギーはそのための手段を提供していた。

今それらは不信感にあぶられている。階級闘争などという語は聞かれなくなつた。たぶんそれは人工的なものさしで、とにかくそれをあてがつ



てみなければ気が済まないといふ、ありていに言えば病気だったのだ。

だが、そのような思考は形を変えて生きている。高貴な人類の英知なるものがどこかに存在して、それを見つけて使いさえすれば、この世の矛盾は解決される。そしてよい社会が出現する、といったナイーブな見解だ。「金で買えないものはない」という発想もその延長ではないだろうか。

しかし、単一の答えを見つけるべきとする発想に対し、はつきりと「NO！」といつてくれるのがこの本だ。タイトルの付け方も気が利いている。確かに多くがうすぼんやりと考えていることを引っ張り出してく

れて、かつかなりきちんとした議論がなされている。たとえばアリの行列から車の行列(渋滞)今まで、かなり面白くてためになら話がたくさんある。

実際、社会集団にも生命体が宿るとななければ説明の付かないことが多い。(アリは誰も命令しないのに、生産に必要な組織とか秩序も持っている。アリがニートをやっているのは見たことがない。

いろいろ見解は分かれると思
うが、ハイエクが構築主義に対
抗するものとした考え方によて
いる。要は社会はほつておいて
も自分で何とかしてしまうとい
うことである。もちろん重要な
例外はあるが、少なくとも社会
の自己調整機能を信頼せよとい
うことになりはない。
これを一言で言えば、大衆は
見かけほどほんやりしてはいな
い、となる。

それぞれ勝手にやっているうちに見えて、全体としてもうまく働いている。いわば細部と全體のバランスがとれているわけだ。人間社会もつまりこれと同じだという。たとえば、スーパーにいって、たくさんの種類の商品が陳列してある。必要な人がいるから、つまり買ってくれる人がいるから置いてある。だが、誰も買い手のところにいて、何が欲しいですか？とか、どんなものが好きですか？などと聞いたわけでも何もない。いわば需給バランスで調整されている。ほつておけばうまくいく典型だろう。

よく市場経済の自己調整機能は神の見えざる手などといつて引き合いに出される。だが、この本での焦点は、人間や社会における見えざる手の存在である。その意味で、本当に大事なのは社会の自己調整機能だ。

インターネットが現実に機能しているのが典型だ。これなど社会がほつといても動いていかなかつたら、成立するはずがない。「人間社会の本来の力をもつと信頼せよ」——社会への信頼から未来が生まれる。そんなメッセージが感じられる本だつた。

社会生態学研究者

森里陽

書

評

『富の未来』(上・下)

A・トフラー著 講談社 定価1,995円

未来说なる学問が流行したことがある。ハーマン・カーンなどの名を耳にした方も多いに違いない。未来说とは読んで字のごとく、未来の展望、予測を目的とした。的中したものもあつたし、そうでないものもあつた。だが、今それを語る者はいない。だいじなのは未来を予測することそのものになかった。今あることの意味を示すことにあつた。そして意味を創造することにあつた。現在とは過去との連続性の上に成立し、未来とは歴史学であり、現在学(そういうものがあるとすれば)でなければならぬことになる。

さらに、時間の流れとは単線的なものではない。明日は今日と確実に違う。主体性ある人間の営みがあり、それらが時間に働きかけて未来が創造されていく。それは厳然たる事実であり、そのシンプルな事実の解釈姿勢が論者を一流と二流に分ける。本書は『未来の衝撃』など大ベストセラーを次々にものにしたトフラーの新刊であり、往時の気風を鮮やかに顯現させるものである。だがトフラーの視角にはいくつかの特徴がある。



一つは今ある無数の変化を子細に観察して、それらの関連性を読み解こうとする点にある。いわば「変化のカタログ」である。そこから何を意味あるものとして選び取るかは読者に委ねられる、そういう種類の本である。二つ目は、われわれが自明とされることがある。未来についての見解はともすれば悲観的なものになりやすい。

それはかつて経済学が「陰鬱な科学」と評されたのと同様である。あるいはオーウエルの「一九八四年」で科学技術の進展が過剰な監視社会をまねくとされたのと同様である。未来への見解は、その時代の持つ不安感や退廃感と密接不可分であるためだ。だが、本書には楽観的といつてもよいものがある。富の未來

する現象の反対側、言い換えれば巨大変化の影の部分をくつきりしたコントラストであつりだす点にある。

未来について考える場合、現在の単純な外挿で議論したくなるのが人情だ。しかし、事象とはそれ単体で存在するものではなく、全体の有機的構図や文脈の中で意味を獲得する。たとえばグローバルな貨幣経済の裏側で進展するローカルな非貨幣的経済の重要性もこの観点から重視を持つ。

三つ目として、価値観がある。未来についての見解はともにとつてきわめて意味深長である。ゆえに人々の主要関心を占める。一時の未来说はその典型であるものの、いかなる学問分野にもその予測可能性への関心と疑問はつきまとふ。

変化に注目すべきなのはこの点からである。ここに現在進行中の変化をしらみつぶしに調べる「カタログ」が意味を持つことになる。

それによつて未来への意味とインパクトを洞察する手段を人は手にする。さらには、それらの変化を機会として捉える手段をも手にする。

トフラーの「職人技」は、時代遅れに見える未来说の新たな切り口を予兆させるものがあるのではないか。

社会生態学研究者 森里陽一



『資本主義から市民主義へ』

岩井克人著 新書館 定価1,575円

一般に対談本にはあまり内容の濃いものが見受けられないのは、常識といえるかもしれない。どうも支払う金額に見合わない気がしてならないが、実際お手軽で安く、つまりの対談本は巷に溢れている。

しかし例外ものもある。本書は対談が持つ化學融合に似た魅力と響きを十二分に提供してくれる。恐らく当人同士さえ予想しなかつた飛躍や脱線が見事な彩色を施している。

まず驚かされるのは、岩井克人氏と三浦雅士氏のひきだしの多さである。それは辟易させられるほどに多彩で、かつ深い（それにしても、三浦氏は聞き手の割に話しあぎの感もあるが）。経済談義をはるかに超えて、文明論、貨幣論、人間論にまで及ぶ。

岩井氏は第一線の経済

る。本書は対談が持つ化學融合に似た魅力と響きを十二分に提供してくれた。恐らく当人同士さえ予想しなかつた飛躍や脱線が見事な彩色を施してゐる。

学者である。もちろんその学者としての業績は、近代経済学の体系化に大きな貢献をなしてきた。だがここで展開される論旨は時としてあまりにミクロであり、時としてあまりにマクロである。あまりに体系的であり、あまりに知覚的である。

このような姿勢は一流の学者
ゆえに許される面もある。しか
しここには社会科学に携わる
者、さらに社会の動きに关心を
持つ者誰しも肝銘すべき新たな
洞察がある。

経済学とは価値の配分に関する科学であつたはずである。その価値を支えるものとは古典派からマルクスにいたるまで労働を価値の源泉とすることで成立してきた。

だが、大括りにまとめてしまえば、その科学的根拠自体に疑問があるとする立場がある。それは科学全般を因果関係に基づく学問とする、従来当然とされた前提を無化することから新たな議論を出発させるものである。

そのためには、あえて社会「科学」者として言いづらいことをも明確に言わざるをえない。循環論法やある種の決定論といった禁じ手を持ち札として切らねばならない場合がある。

本書は近代への懷疑を出発点とする。当然とされた近代経済学とマルクス経済学の二項対立的図式をはるかに超越した視座を提供する。単線的な歴史観の限界を喝破する。

れた意識自体を疑わなければ新たな体制も人間もありえないとする点にある。

漱石のいう「文明の皮が破れる」状態であり、そこではむき出しの欲望が噴水する。それは、文明自体の内部運動である。ライブドア問題も村上ファンド事件も、その意味で単なる経済事件ではない。欲望の奔流の萌芽にほかならない。

しかも皮肉なことに、岩井氏は高度な資本主義を新たな運動体に転換しうるものも、やはり資本主義以外にありえないとする。この点において本書は驚くほどに「保守的」である。

ゆえに岩井氏の言う市民主義とは少なくとも新しい経済運動でもなければ社会運動でもない。最も古典的な意味で人間観の転換にほかならない。

本書 자체も対談という形をとることではじめて「皮を突き破る」ところがある。その偶発性ゆえの成果は不思議な読書体験をもたらしてくれる。

とするならば、現在われわれが目の当たりにする高度資本主義の帰趨はどうなるのか。少なくとも、本書はこの問いに答えていはない。

社会生態學研究者
森里

書

評

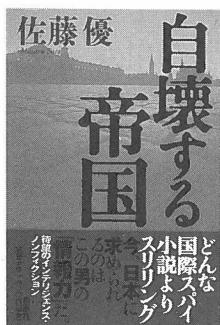
『自壊する帝国』

佐藤優著 新潮社 定価1,680円

『國家の罠』(新潮社)に続く外交官・佐藤優氏による第二作である。外務省のラスプーチンと呼ばれ、その卓抜な人脈と情報力でならした人物である。神学を修めた形而上学的知性が、そのあまりに現実的なポリティクスにいかに渡り合うか、刺激的な読み物である。

ソ連崩壊から一五年以上が過ぎようとしている。その内幕は阿鼻叫喚であつて、生き馬の目を抜く国際舞台の面妖な内実を肌で実感させてくれる。自壊にいたる生々しい動向を内側から見たジャーナリストイックな作品というのが正当な評価かもしれない。きびきびした無駄のない文体と美しさ、そして西洋思想に精通した確かな筆致に幻惑される。

それらも一知識人によ



上が過ぎようとしている。その内幕は阿鼻叫喚であつて、生き馬の目を抜く国際舞台の面妖な内実を肌で実感させてくれる。

ソ連崩壊から一五年以

聖さへの渴望と淫蕩なまでの俗性が見事に矛盾なく同居しそれらが不思議で妖しい光彩を放つ。

ロシア特有の風土もある。神

聖さへの渴望と淫蕩なまでの俗

性が見事に矛盾なく同居しそれらが不思議で妖しい光彩を放

つ。

著書自身の持つイメージにはどうもこのあたりがだぶつてしまふ。それは独特的の胡散臭さと

外交官にしたい」とまでいわせ

まない。

政府中枢の登場人物の一人には「わが息子をあなたのよう

る。確かに事実だろうし、人心

を掌握する能力には卓越したも

のがある。

にもかかわらず、すべてが乾

いている。乾いており覚醒して

いる。同情を誘うセンチメント

がいたつて希薄なのが不思議な

ほどある。

さらには政治ドキュメントと

しても読もうと思えば読めるの

だが、これがまた難物である。

客観的な政治書として読むには

ノイズが多すぎる。

それに政治の書として見るな

る特異なソ連崩壊体験である。どちらえどこのなさからか、いくつかの読み方が可能と思う。ロシア文学を好む方はある種の既視感があるかもしれない。バザール的と評されるように、多数の登場人物が一様に自己を主張し、わめきあう。高まる混沌の他方で不思議な調和を醸す。時間感覚をも超越する壮大な物語である。

一方で強烈な自己弁護の書でもある。

自らの情報収集能力、人脈力を誇り、さりげない言動のなかにも自らの正当性を主張してやまない。

実際ラスプーチンの異名はまだではない。そのインテリジェンスは陰湿で独善的である。ド

ンスは誰もいない。少なくともそれが単独プレーであり、英雄的行为であるかのようである。

いくら外交官とはいえ、公私

の区別くらいはあるはずである。著者にとっては公の部分が過剰に内面化されていて、私的

なヒロイズムが何の矛盾もなく混同されている節がある。

國際派と自他ともに認めつつ、やはり公私が無限に流通する日本の精神の持ち主なのだ。

それと混同されている節がある。國際派と自他ともに認めつつ、やはり公私が無限に流通する日本の精神の持ち主なのだ。

全編通じて異様な空気が支配し、自らですら劇中の一人物を見る演出家のような覚醒した視線が恐い。その射る先是ロシアの大地のように茫洋としてどちらどころがない。そんな作品である。

もつともその臭みが本書の魅

力であることは認めなければならぬ。ゆえに文句なしにおもしろく、上等の読み物であることは確かである。

社会生態学研究者

森里陽一

書

評

『ハイエクと現代リベラリズム』

渡辺幹雄著 春秋社 定価6,090円

どういうわけかハイエクは好きである。違つて見える。侃々諤々の激論のなか、一人うつすらと笑みさえ浮かべて、敵の攻撃をひらりとかわす皮肉な紳士のようだ。ハイエクが何者なのかについて、ヒントを得た気がした。しばしば市場万能主義の権化のようにいわれる。間違いである。あえて一言でいえば、反一元論者である。とはいっても、批判や反対で時間を無駄にする無粹者ではない。

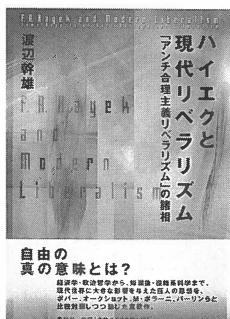
彼はいう。「原理といふものはないよう見えてもこつそりその姿を現す」。彼に原理なるものがあったのか。それが本書の問い合わせである。

晩年の彼は東洋哲学に惹かれるほどに、反一元論への思いを強めたとい。彼の偉大さは「特定の原理」を見きわめた点ではなく、「特定の原

理」をあえて見きわめなかつた点にある。「原理」なきところに、体系性を見出そうというのなか、一人うつすらと笑みさえ浮かべて、敵の攻撃をひらりとかわす皮肉な紳士のようだ。

ハイエクが何者なのかについて、ヒントを得た気がした。しばしば市場万能主義の権化のようにいわれる。間違いである。あえて一言でいえば、反一元論者である。

彼はいう。「原理といふものはないよう見えてもこつそりその姿を現す」。彼に原理なるものがあったのか。それが本書の問い合わせである。



ハイエクの反合理主義は政治学のものでも、経済学のものでもない。あえて言えば、一般教育（リベラル・アーツ）に近いのかもしれない。応用可能かつ実践的である。同時に運動体であり、「危機」時に立ち現れ行動の指針となる。

ハイエクと他の経済学者を分けるものはそこにある。本書で現れる分析手法にそれがよくとられる分析手法にそれがよく現れている。水墨画を想像するとわかりやすいかもしれない。墨に五彩ありといわれるよう

筆者はハイエクと同時代人との比較を通じて、その陰影を描いている。ミーゼス、オーベック、ポラードなどが検討の俎上に上り、それぞれの観点から光を当てる。同時に全体としての構図を看取しようとすると、

ハイエクの知的遺産は大胆であります。むろんそのとおりである。だが真面目も限度を超えると恐怖に変わった。

他方、現代から見ても、ハイエクの位置は小さいものではない。むしろ、近年ベストセラーとなつた『バカの壁』（養老孟司）や『国家の品格』（藤原正彦）などは、恐らく期せずしてハイエク的な論理をフル活用している。要諦は反一元論、反合理主義にある。実際に多くの読者を獲得し、共感を得ている。

本書は平易ではないが、ハイエク理解の方法を示してくれる希有の良書であることは間違いない。ただ残念なことに、ハイエク自身の著書は入手が難しい。全集も出ているが、大半が絶版である。『隸属への道』以外にも重要な著作は多い。この機会に復刊を望みたいものであ

が進る。さらに全体からダイナミックにとらえなければ認識できない。

筆者はハイエクと同時代人の比較を通じて、その陰影を描いており、ミーゼス、オーベック、ポラードなどが検討の俎上に上り、

それぞれの観点から光を当てる。同時に全体としての構図を

看取しようとすると、ハイエクの知的遺産は大胆であります。むろんそのとおりである。だが真面目も限度を超えると恐怖に変わった。

蛇足ながら、ハイエクは、ある種のいい加減さの持つ妙味を教えてくれる。真面目はよい。いい加減はよくない。むろんそのとおりである。だが真面目も限度を超えると恐怖に変わる。

極左やイスラム原理主義ほどに

面白目な人々はない。

本書は平易ではないが、ハイエク理解の方法を示してくれる希有の良書であることは間違いない。ただ残念なことに、ハイエク自身の著書は入手が難しい。全集も出ているが、大半が絶版である。『隸属への道』以外にも重要な著作は多い。この機会に復刊を望みたいものであ

り。むしろ、近年ベストセラーとなつた『バカの壁』（養老孟司）や『国家の品格』（藤原正彦）などは、恐らく期せずしてハイエク的な論理をフル活用している。要諦は反一元論、反合理主義にある。実際に多くの読者を獲得し、共感を得ている。

そもそも経済学になかつたことでも証されている。同時に政治学も心

社会生態学研究者

森里陽一

書

詩

『ドラッカー入門』

上田惇生著 ダイヤモンド社 定価1,680円

アメリカの思想家エマソンは、良き書物の条件とはただ一つ、読む者の精神、魂を躍動させる点にあると述べた。それは、ドラッカーの読者の多くがおしなべて感じるところでもある。啓発的であり、想像力を刺激する。本書は、そのドラッカーと長年にわたり交説を持つ著者による入門書である。

おおむね入門書と称するものは標準化と理論化を試みる。結果原典よりもはるかに難解になる。だが、この入門書はひと味違う。よき入門書は、よき出門の書でもある。門下にとどまることなく、新たな世界に誘う扉を提供してくれる。標準化も精緻化もない。押しつけがましさもない。啓発的な原典を啓発的なままに再構成してみせる希有な入門書である。

その反面、というか代



術、芸術、まさに知の百貨店だつた。おいそれと理論化できようなやわな論者ではないのだ。経営学者という固定観念を持つて読む者は、大いに期待を裏切られるはずである。

帶には、「二十世紀に身を置きながら二十一世紀を支配する思想家」とある。少々大袈裟でいささか褒めすぎかもしれない。しかし、不思議な納得觀を覚える。彼は存命中に古典を書き続けたのでは、との思いを強くする。

確かシュンペーターだつたと思うが、革命的な論者と共に通する条件とは、彼らがみなベストセラーを書いた点にあると言つた。彼らは例外なく革命的なことをわかりやすい言葉で伝える特異な能力の持ち主たちであつた。既存の言語やコンセプトによらない論理を駆使し、現実を変革した。戦後のマネジメント革命の影響力と、著書がことごとくベストセラーとなつた事実を思い合わせれば、ドラッカーもその系譜に属すると考えてよいだろう。

他方、革命的論者には本人の死後に厄介な問題が現れる。その発言内容はエピゴーネンによる俗流化を余儀なくされる。俗流化とは標準化・理論化の別称でもある。「定番」の解釈が現れ、言説の持つ独自の芳醇な香りを消し去ってしまう。

ドラッカーが昨年亡くなり、今後どのような評価を受けるのかはわからないが、同様の圧力を受けることは間違いないであろう。そこで俗流化を阻止する唯一の方法は、解釈者が自らの経験と言葉で「語る」ことしかありえない。その発言や活動を経験として語り継ぐ以外にありえない。本書は理論化を志向しない、その一点だけでも俗流化の防波堤を提供している。個別の・具体的でありますながら、普遍的・具体的でありますながら、普遍的に通じる道を示してくれる。

ドラッカーの名は聞いたことがあるがまだ読んだことがないという方、経営学者のイメージが先行する方は、手始めに本書から入ることをお勧めしたい。

森里陽